（第3種郵便物認可）
北陸中日新聞
SUNDAY

地名は生きる

石川県白山市美川地域

仏壇

耐久力誇る〝工芸品〟

一級河川手取川の河口沿い、県道から狭い坂道を上がると、立ち並ぶ民家の中、美川塗の製造販売元の一つ、北島仏壇一の工房がある。築百年過ぎた木造建物の内部に、塗と木材の独特の香りが漂う。

工房では、木地や漆塗り、金箔など工程を分担した二十人以上の職人たちが黙々、働いている。「手作業の技術の集積が、仏壇という芸品になります。大量生産品とは耐久力が全く違います」と、同店の四代目店主北島昭浩さんは話す。

唐破風（からはふ）を取り付け、仏壇を組み立てる職人

霊峰白山を源流に、加賀平野を流れる手取川。その河口位置する石川県旧美川町（現白山市）は、江戸時代には北前船の寄港地として栄え、県内屈指の経済力を誇った。

一八七二（明治五）年から、発足まもない石川県の県庁が置かれた。当時の城を探しに来るのに困窮したのが主な理由。一説には、金沢に残っていた用箒（ほうき）の職人たちが金沢を離れ、美川仏壇の祖先塗師時代、応仁の乱の京都から、戦火を逃れて移って来た小松長吉という職人とされる。

港町では、良質の木材を確保できる、仏壇つくりは、船大工たちの腕だけでもなる。この地の仏壇つくりは江戸時代、加賀藩主の前田家の保護のもと、工芸技術を吸収し、長崎、金箔、蒔絵のほか、型紙から文様を取り出す独自の技法などで、豪華さと繊細さを加え、美川塗の特徴を出した。

美川塗の特徴は①全商品に木地から漆を用いる②さび処（ところ）の漆は、漆を用いない③すべての品から分解・組み立て可能なこと―これらの特徴が組み合わさり、湿気の多い北陸地方にも、二百五十三年の耐久性を誇る。

「二百五十年という期間は、大切な戒の木が、成長するサイクルと一致します。先人たちは、それを意識していたのではないでしょうか」と北島さん。

石川県内の十五店舗で構成する美川壇協同組合がいま、力を入れているのは、偽装品対策だ。外国産材やプラスチック部品、揮発性溶剤などが使われた偽物・美川仏壇」に国会側まぜる動（地場ブランド）の認定を受けた、組合が設けた基準を満たす仏壇には、鑑定書とプレートを発行している。

加盟店が売った仏壇に対しても、年に一度、無作為抽出で検査する。内部にも厳しい品質維持を求め、信用力の強化を図っている。

（西津健、写真も）

手取川のほとり、石川ルーツ交流館の敷地内にある美川庁跡の記念碑

江戸時代には北前船の寄港地として栄えた現在の美川漁港

由来

合成地名の第1号？

参考折衷式合成地名は、かつ明治二十二年の町村大合併、明治後期の郡の統廃合、戦後の市町村合併、住居表示事業、平成の大合併と続く地名処理の大分岐とされて来た。明治二年の美川町は、その合成新地名の第1号だったようだ。

結論を先に言うと、この地名は明治二（一八六九）年、手取川河口北岸の石川郡本吉町と南隣の能美郡湊村が合併、郡名をそれぞれ一字（能美郡の「美」と石川郡の「川」）取って組み合わせた合成地名である。

石川郡本吉町は、中世まで何度も変転した手取川の筋が現在の放水路になる江戸期に積み出し港として発展、江戸末期には北前船も寄港し、幕末の戸数は千百を超えた。対岸の能美郡湊村は、江戸期、加賀平野の穀米を、江戸方面に積み出す河港として発展（文政十七）年に戸数は千百を超えた。幕末時には数百戸を数えた。

「美川」の町名の一字となった能美郡の名は古代の郡長官郷（現・小松市能美郡）が原型で、手取川扇状地の扇頂部（現・白山市鶴来）に置かれた。

一月、旧・能登国も合わせ第一次石川県の県庁は金沢に置かれる。その八年（文政十七）年一月の白山市誕生まで存続した。

石川県の名は、中世の荘園名に由来する。「石川」は、二〇〇五（平成十七）年一月の白山市誕生まで存続した。

「美川」の町名の一字となった能美郡の名は古代の郡長官郷（現・小松市能美郡）が原型で、手取川扇状地の扇頂部（現・白山市鶴来）に置かれた。

「美川」の町名の一字となった能美郡の名は古代の郡長官郷（現・小松市能美郡）が原型で、手取川扇状地の扇頂部（現・白山市鶴来）に置かれた。

一方の本吉町の名は、分流・乱流する手取川の筋が現在の放水路になる江戸期に積み出し港として発展したものの、中世の荘園名に由来する。

（地名情報資料室主幸・樹原 依介）

ているという。食品の偽装問題と同じで、販売者が悪用しないと限り、まず消費者には分からません。

同組合は二〇〇七年、特許庁から地域名と商品・サービス名を組み合わせた「地域団体商標（地場ブランド）」の認定を受けた。組合が設けた基準を満たす仏壇には、鑑定書とプレートを発行している。

加盟店が売った仏壇に対しても、年に一度、無作為抽出で検査する。内部にも厳しい品質維持を求め、信用力の強化を図っている。

（西津健、写真も）